

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「きれい」という感覚について： 特集 建築物清掃と環境衛生

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4860

建築物清掃と環境衛生

- I. 「きれい」という感覚について
- II. 清掃と環境衛生
- III. 清掃作業に伴う洗浄污水处理
—洗浄廃液の処理方法及び関連法規制等について—
- VI. 清掃作業における揮発性有機化合物

I. 「きれい」という感覚について

国立民族学博物館 研究戦略センター長 教授
森 明子

1. はじめに

ヨーロッパの生活文化について調べていると、日本のよごれに対する対応の仕方が、ヨーロッパと相当に異なることを発見して驚くことがある。いろいろと比べてみるうちに、洗濯、入浴や台所仕事、掃除の仕方など、日常のさまざまな行為を貫いて共通するものがあることに気がついた。ここで関心をよせているのは、知識の問題ではない。私たちがよごれをどのように取り除こうとするか、どのようであったらきれいだと感じるかという、意識下にある身体感覚とでもいうべきものである。

日本のよごれに対する対応では、水で流すことがたいへん重要である。それに対してヨーロッパでは、力を加えてよごれを擦り落とすことが重要で、擦り落としたよごれを受けとめるために溜めた水を利用する。

私たちが流れる水を好むことは、ケガレをはらうミソギにも通じる。「水に流す」という言い回しがあるように、私たちは水で流すことによって、よごれをはらい、もとの状態に戻ることを期待する。流れる水そのものに、清浄にする力が備わっていると考えているようでもあり、身体感覚であるともいえる。一方、ヨーロッパの洗濯や清掃は、よごれを封じ込め制圧しようとする知恵と技の蓄積であり、それは「衛生」という考え方にもつながっていくものだと思う。「清浄」と「衛生」は、ともによごれに対比される語であるが、

そのよごれに対する姿勢はまったく異なる。

日本人が、よごれをどのようにとらえ、それに対処しているのか、ヨーロッパの人たちが、よごれを擦り落とし、制圧していく技と比較しながら、あらためて考えなおしてみよう。

2. 洗濯

洗濯水の温度と、洗濯をする頻度、洗濯後の仕上げにヨーロッパと日本の洗濯の違いが表れる。順にみていこう。

2.1 洗濯水の温度

ヨーロッパの人々は、洗濯には必ず温水を使う。それは、19世紀の洗濯でもそうであったし、洗濯機を使う現代の洗濯でも同様である。洗濯機には、温度設定ダイヤルがついていて、30度から90度のあいだの数段階の設定から選ぶことができる。綿や麻には90度、ウールや化繊にはぬるめを選ぶ。温度を決定するのは繊維の材質であって、繊維がゆるす限りできるだけ高い温度を選ぼうとする。日本のように、よごれの種類によって洗濯を別にするのではない。日本では、よごれの種類を考慮して、下着と上着を区別して洗う。女子高校生が、自分の衣類をおとうさんの下着と一緒に洗わないというのも、この延長上に位置する感覚といえるだろう。私の知る限りで、ヨーロッパでは、そ

ういう意識はないようだ。よごれの種類で区別しないのかと聞いたことがあるが、「洗ってきれいになるのだから、何と洗っても一緒だ」という答えが返ってきた。「洗ってきれいになる」と言い切れるのは、「きたないものは高い温度で完膚なきまでに退治される」という確信があるからだ。洗濯水の温度は、ヨーロッパの洗濯で、重要な要素である。もっとも、近年では、省エネルギーの思想が洗濯にも及んできて、「さほど高温にしなくてもきたないものは退治されるから、エネルギーを節約するべきである」という考えがひろまり、高温と中温による菌の死滅を比較した実験結果も添えられている。それでも、ぬるい湯ではよごれが落ちた気がしない、と高温で洗濯することを好む人は少なくない。



システムキッチンに組み込まれた洗濯機。複雑な温度調節ダイヤルがついている（ドイツ）。【森明子撮影】

2.2 洗濯の頻度

洗濯を温水で行うなら、湯を沸かしながら洗うことになる。したがって、たとえ洗濯機を使うとしても、洗いあがるまでにかかる時間はかなり長い。このような洗濯に馴れていない私のような者には「たかが洗濯のためにどれだけの時間を」という気持ちが起こるのであるが、ヨーロッパの人々にこの発想はない。ヨーロッパでは、洗濯はほんらい大仕事なのである。

洗濯機のない時代、人々は、湯をわかしながら洗濯していた。別棟につくられた洗濯小屋か、住居の地下室に洗濯専用の空間があり、そこには洗濯窯が据えてあった。洗濯窯には、煙突がついていて、下から火をくべて焚くようにできている。リネンのごわごわとした生地で作ってあったシャツやシーツは、何度も熱い湯の中で洗うことによって、肌に馴染むようになった。

私がオーストリアの村の人に聞いたところでは、以

前は、洗濯はたいい月曜日におこなうもので、それは女性奉公人の仕事だったという。洗濯はきつい労働で、上等な仕事とはみなされていなかったからである。そのかわりに主婦は、料理や子供の世話をしたという。



チロル地方の洗濯小屋（左）。その右に隣接するさらに小さい建物がパン焼き窯で、左は菜園。少し離れて母屋が見える（オーストリア）。【森明子撮影】



洗濯窯。いまは屠殺した豚の内臓を煮るのに使っている（オーストリア）。【森明子撮影】

月曜日に洗濯をすることは、生活のリズムのなかに位置づけられていた。日曜日は安息日であり、身体を洗い、1週間身に着けていた服を着替えて、教会に行った。入浴することが少なかった時代、衣類が身体のよごれを受けとめていた。その家族の衣類を月曜日に洗ったのである。繊維深くにはいりこんだ頑固なよごれは、日曜日の夜から灰をとかした水につけておくことで、浮き出しやすようにした。月曜日は早朝から、洗濯窯に火をくべてこれを洗った。

ドイツ語の「洗う」waschenという語は、熱い湯を使いながら、叩いたり擦ったりして繊維のよごれを落とす行為を意味する。時間をかけて洗うことによって、よごれはゆっくりと温水に浸み出してくる。繊維の表面に浮き出したよごれを流し去る行為を「濯ぐ」

spülen といって、これには温水を使わない。ふたつの行為は連続しているが、温水と冷水の違いがあり、空間的な移動もともなうので、はっきりと区別される。洗濯は火を焚くことのできる専用の屋内空間で行い、その後、濡れた洗濯物をもって小川まで移動し、川の流れて濯いだ。川で洗濯物を濯ぐ光景は、日本でもおなじみである。「おしん」にそのシーンはあったし、むかしばなしの「桃太郎」でも、おばあさんは川に洗濯に行く。しかし、ヨーロッパの人にとって、それは洗濯ではなくて、濯ぎの光景である。濯ぎも重労働だったが、それよりも洗濯のほうが、はるかにたいへんだったと聞いた。



濯ぎ小屋。かつて村の女たちは、洗濯の終わった衣類をここで濯いだ（フランス）。【森明子提供】

洗濯物は、生垣や草地の上にも広げて干した。それは洗濯干し専用の、きれいな草地だった。脱水機がない時代、リネンが乾くまでに、二日くらいかかることもめずらしくなかった。洗濯物を、夜間も干したままにしておくことは、日本ではだらしないこととして戒められるが、私の経験したところでは、ヨーロッパでそういう意識は少ないようだ。干した後は、かならずアイロンをかけた。

都市の場合、洗濯室はたいがい集合住宅の地下にあり、湯を沸かす窯や、濯ぎに使う流しなどが備わっていて、全住人が利用した。ひとつの家庭の洗濯で洗濯室を一日あるいは半日専有することになったから、誰がいつ洗濯室を利用できるかということが、あらかじめとりきめられていた。つまり、洗濯は思いついたときにするものではなく、あらかじめ計画をたて、準備を整えてするものだった。洗濯物を干すのは、集合住宅最上階の屋根裏空間がふつうだった。その空間でも、誰がいつどこを使うか、とりきめがあった。洗濯物が

乾くまでに、最低でも2、3日必要であり、そのちにアイロンかけがあった。

2.3 洗濯の仕上げ

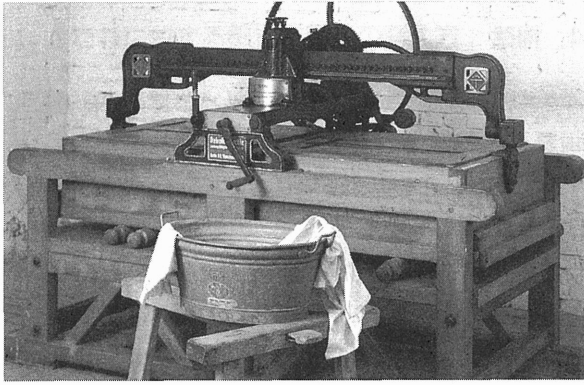
ヨーロッパの人々は、アイロンをたいへん重視する。それは、洗濯の最後の行程で、これによって洗濯は完了する。日本でもアイロンを使うが、ヨーロッパのほうが重要な位置づけをされているように見える。既述のように、ヨーロッパの衣生活は、リネンを多く使っていた。その強情な繊維は、アイロンをかけることによって、やっときちんとまとまった。数日かけてゆっくり乾いたリネンは、アイロンという熱を与えることによって、美しく仕上げられた。

仮に、洗濯の美学ということばがあるとしたら、アイロンかけは、ヨーロッパの洗濯のひとつの美学といえるだろう。アイロンをかける前は、人の思いにまかせない繊維が、見違えるようにまっすぐにのび、折り目をつけて、同じ大きさにたたまれていく。どの家庭でも、衣装棚をあけると、角を揃えて下から上へまっすぐに積み上げられたリネン類が目飛び込んでくる。それはまさに、秩序のなす美である。



衣装棚。アイロンかけがなす秩序の美である（オーストリア）。【森明子撮影】

ところで、現在は薄い繊維を使うから、アイロンかけも楽になったが、かつてリネンのしわをのばすには、マンゲルという器具を使った。ローラーの原理を利用して繊維のしわを伸ばす装置である。木のロールに衣類を巻きつけて、上から強い圧力をかけながらロールを転がし、しわを伸ばす。家庭用のものもあったが、大がかりな装置をもった店に行って、使用料を払って使ったという。このようなマンゲルを使うためには、あらかじめ予約しておく必要があった。



マンゲル。木製の台にはさまれたロールが左右に回転するうちに繊維の皺を伸ばした（ドイツ）。【森明子撮影】

予洗いからアイロンかけまで、洗濯の全行程は4～5日にわたり、計画的に行われた。手間暇をかける重労働だったから、頻繁にすることはできなかった。また、いちどにする量も、かける労力と時間に見合うものでなければならなかった。それゆえ洗濯の頻度は、せいぜい週に一度で、シーツなど大きな洗濯はそれよりさらに少ない頻度で行なった。

日本の洗濯は、これとはまったく異なる。賢い主婦の洗濯は、風呂の残り湯などを使って、こまめに行うべきものである。平岩弓枝の短編は、このような私たちの意識をたくみに表現している。

木から木へ、庭のたたずまいをぶちこわしに張りめぐらされたビニールの綱に、よくもまあこれだけためられたと思われるほどの洗濯物が、ところせましとぶら下がって雨を浴びている（平岩弓枝「意地悪」より）。

洗濯をしたのは嫁で、この光景を見ている姑は「何日洗濯をしなかったかが一目瞭然」と、嫁の洗濯に舌打ちをする。私たち日本人にとって、洗濯は毎日するのがふつうなのである。

ヨーロッパで生活しているとき、私が一度にする洗濯物の量は、他の人の十分の一くらいだった。洗濯機を使うとなると、馬鹿げているだろうかという気持ちも起こる。「もったいないから、もっと洗濯物を溜めてから洗え」と、知り合いに言われたが、脱いだものを何日もおいておくことのほうが、私には苦痛だった。もともと、たいしてよごれているわけではない、一度水をくぐらせて、汗と埃を落とし、さっぱりさせたいというのが、私の洗濯の目的だった。

軽いよごれであっても繊維の上にそれを長い間放置しておくことを不潔と感じ、頻繁に洗濯する。こうい

う洗濯は、行程が少なく、全体が短時間で済むものでこそ可能である。その場合のよごれは、叩いたり擦ったりしなくても、流しただけですぐに落ちる程度のものである。

3. 入浴と台所仕事

ヨーロッパと日本では、洗濯に想定されているよごれの程度や質に違いがあった。それは身体の洗い方とも関連がある。まず、頻度が違った。ヨーロッパで身体を洗うのは一週間に一度、多くは土曜日の夜だった。それ以外の日は、首のまわりや腕などを、洗面器で洗う程度だったという。身体を洗うかわりに、衣類が身体のよごれを受けとめていたのであり、いったん受けとめたよごれを落とすのが洗濯だった。

現代でも、ヨーロッパの人がバスにつかることはそれほど多いとはいえない。そのかわり彼らは、シャワーを頻繁に浴びる。ただし、ヨーロッパの人のシャワーは、出勤前や外出前に、身だしなみを整えるために使うもので、日本人が一日の終わりに入浴するのとは意味合いがかなり異なる。そのシャワーにしても、一般の家庭に普及したのは、それほど古いことではなかった。

富裕な家は別として、一般の家庭には浴室というものがなかった。日本の家庭でも風呂のない家はいくらかもあったが、日本では銭湯に行って入浴することが通常であった。では、銭湯のないヨーロッパでは、どのように身体を洗っていたのだろうか。

大きな盥を台所や寝室の床において湯を入れ、その中に身体を浸した。どの家庭も、身体を洗う専用の盥をもっていた。湯の中で石鹸を使い、身体のよごれを湯に溶かし出す。台所や寝室の床の上で水を流すことはできないから、洗い場はもちろんない。湯によごれを溶かし出したのちは、身体についた泡や石鹸水をバスタオルで拭きとることで、入浴は終わった。フランスのエドガー・ドガは、このように盥で入浴する女性の姿をいくつも描いている。

現在のヨーロッパ式のバスが、泡を立てて湯の中によごれを溶かし出すスタイルであるのは、このような浴室以前の盥の系譜をひくゆえであろうと私は思う。現在は、バスタブの湯を抜いてシャワーを使うことができるが、バスタブの外で身体を洗い流すスペースは用意されていない。

日本人の入浴では、よごれを落とすために浴槽を使うことはない。よごれは、洗い場で湯を流して落とす

のである。風呂にはいるのは、湯につかるのが好きだからで、ヨーロッパの人がよごれを落とすために湯につかるのとは、目的が違う。

よごれを落とすための、このような水の使い方の違いは、台所仕事でも同様に見られる。食器を洗うときに、ヨーロッパでは熱い湯に洗剤を入れて洗剤液をつくる。そのなかに肉料理がのっていた皿やナイフやフォーク、デザートの実物皿、コーヒーカップ等々、すべての食器を入れる。泡のなかでひとつずつ擦り、洗剤液からひきあげて、流し台の上におく。食器は泡だらけで、その泡と水分を乾いた布で拭きとり、そのまま食器棚に収める。私たちの感覚からすれば、食器の表面にはまだ洗剤が残っているはずで、水を流す行程が必要なのであるが、ヨーロッパの人は、布でふきとることで済ましてしまう。これは、バスタブからあがった身体をバスタオルで拭いて済ませる入浴の仕方と通じるものである。別のボールにきれいな湯をいれて、いちど食器をくぐらせる人もいるが、年長世代の多くは、そんなことをする必要はないと考えている。

泡が残っていることを意に介さないこと以外に特徴的なのは、肉の脂肪がついた皿とコーヒーカップを、同時にひとつの洗剤液につけることである。日本人であれば、洗剤水に入れるとしても、よごれの種類に応じて、入れる食器の順番を考えるだろう。実物皿や、コーヒーカップをまず洗い、脂肪がついているものは最後にする。なぜなら、脂肪をたっぷり溶かしこんでいる洗剤液にコーヒーカップや実物皿を入れると、逆によごれがつくような気持ちがするからである。一方で、ヨーロッパの人が必ず熱い湯を使うのに対して、日本人は必ずしも湯を使わなければならないとは思えない。

ヨーロッパの洗濯や入浴、食器の洗い方には、共通する特徴がある。湯を使うこと、溜めた湯のなかによごれを溶かし出すこと、よごれの種類による区別をしないこと、洗ったのちに石鹼分を水で流すことは不要なこと、などである。ここから、ヨーロッパの人々が、洗剤を溶かした湯に対して、相当の信頼をおいていることが読みとれる。目の前の洗剤液の中で、よごれは制圧されているのだ。これに対して、私たちは流れる水で洗い流したいと思う。よごれを受け止めた水は、そこに留まっていはいけない。私たちにとって、よごれは制圧されるのではなくて、水の勢いに乗ってどこかに去っていくもの、目の前から消えてなくなるべきものなのである。

4. 掃除

さて、掃除についてもヨーロッパと日本では違っていて、よごれに対する姿勢の違いを表わしている。まず、私たちになじみの深い日本の掃除についてとりあげよう。

掃除という日本語は、「掃き、除く」という二つの動詞から成っている。除かれるのは埃や小さなゴミの類で、ハタキ、箒、雑巾、バケツを使って行なう。近年の掃除では、ハタキを使うことが少なくなったが、ハタキは住まいの清潔のために重要な役割を果たしている。その役割とは埃を取り除くことである。箒は床面の埃を掃き寄せるために用いる。では、雑巾はどうだろう。私たちの掃除では、雑巾は固く絞ることが好まれる。この雑巾は、箒だけでは取り除くことができなかった埃を、一時的に固定するものである。固定された埃は、バケツの水にすぐに放され、その水も10分するかしないうちに庭に撒かれる。雑巾もまた埃を取り除く行為の一部であり、したがって「掃除」を構成するのである。

このような掃除を専門にする女性を、日本語で掃除婦という。ドイツ語でそれにあたることばは、プッツフラウ Putsfrau で、それは「擦る（磨く）」を意味する動詞プッツェン putzen と、「女性」を意味する名詞フラウ Frau の合成語である。「擦る（磨く）」と「掃き、除く」では、ずいぶんとそのイメージが異なるが、この違いは、日本とドイツの掃除の仕方そのものにあてはまる。

ヨーロッパの掃除では、「擦る（磨く）」過程を欠くことができない。「ブラシで擦る」行為と「磨いてつやを出す」行為が含まれている。ワックスをかけるのもその一例である。ワックスというような油分を与える掃除は、ほんらい日本の一般家庭の掃除にはなかった。

日本とヨーロッパでは、雑巾の使い方が全く異なる。日本では水に浸して使うが、ヨーロッパで掃除に使う布は乾いていて、つねに若干の油分を帯びている。この油分が、汚れを封じ込めると同時に、つやをだすはたらきもする。この乾いた雑巾は、いちどの使用で洗うことはない。数日間使った後に、煮沸に近い温度で十分時間をかけて洗うのである。ヨーロッパのプッツフラウの姿は、たとえば映画「マイフェアレディ」の女中さんたちが、白い布を手を持ちながら、階段で合唱している姿を思い出していただければいい。彼女たちは、つねに家のそこらじゅうを磨いているのである。

5. よごれに対する感覚と衛生の考え方

掃除にあらわれるよごれに対する態度の違いは、気候、食べ物、家屋構造、労働など生活のあらゆる側面が複合し、歴史とともに形成されてきたものである。たとえば、オーストリアの食べ物についてみると、人々は伝統的に油脂を多く摂取する。貧しい生活をしてきたかつての農村の人々は、じつは私たちが思っているほど肉を食べていたわけではなくて、雑穀の粥を多く食べていた。ただし、彼らは、その雑穀の粥のうえに熱く熱したラードをたっぷりかけることを、このうえなくおいしい食べ方だと思っている。豚を一頭屠れば、肉とともにかなりの量の脂身もあり、それはラードとして加工される。ラードは、調味料であり、保存食であり、重要な熱量源として、食事の味の基幹を形成してきた。頻繁にラードを使う食生活において、油脂は身近である。よごれた油はブラシを使ったり、煮沸したりしなければ取り除けない。一方で、油をすべて取り除くことは不可能であるし、その必要もない。油よごれをとるには、油をもってするのが、もっともよい方法である。「擦る（磨く）」というのはこのことで、ヨーロッパの掃除の基本をなすのである。

ところで、ヨーロッパの人々が、油脂とこのように親しくつきあえるのは、乾燥した気候のおかげでもある。日本のように湿度が高ければ、ラードの保存は難しい。日本人は、ラードのかわりに、ヨーロッパの内陸の人には手の届かない、米や魚を食べている。湿度の高い日本では毎日入浴したくなるし、毎日身体を洗っていれば、洗濯も簡単に済ませることができる。油脂をほとんどとらない日本の食事では、水で流す程度で食器もきれいになるが、ラードを多く含む食事であ

れば、熱い湯を使わなければ、食器はいつまでもべとついているだろう。

繊維についてみると、日本のやわらかな綿繊維は、こまめに水ですすぐ生活の中で日常着として定着してきた。これをヨーロッパ式で洗濯しようものなら、ひとたまりもない。日本で買ったシャツは、すぐにだめになる、と知り合いのドイツ人は言うが、それは洗濯の仕方が悪いのだと私は言い返すことにしている。一方、ヨーロッパで古くから使われてきたリネンは、水洗いで菌の立つような代物ではない。高温の湯の中で叩き、さらにアイロンをかける、という繊維をいためつけるような過程を何度もくぐるうちに、なじんでくるのである。

日本人の食生活は変化し、油の摂取量は確実に多くなっている。食生活だけでなく、生活のあらゆる面で、ヨーロッパ生まれの道具や考え方、ライフスタイルが日本人の生活の奥深くに浸透してきている。それでも、日常の中に埋没している毎日の家事が、日本とヨーロッパで、なおこのように違っているというのはたいへん興味深いと思う。

日本のよごれに対する対応の仕方は、衛生というより清浄という感覚に近い。それに対して、ヨーロッパの対応の仕方は、よごれを制圧しようとする強い意思を感じさせる知恵と技の体系である。それは、さらに管理の体系としての衛生と直結するように見える。だが、当のヨーロッパの人にとっては、それが当然あるべき感覚であることも事実だ。日本の洗濯機は湯が出ないから、鍋で水を沸かして洗濯槽に入れる、というドイツ人女性がいる。彼女にとっては、水ではやはりきれいになった気がしないのである。



村祭りの風景（オーストリア）【森明子撮影】